

数え切れないほど近現代文学の舞台となった武蔵野には、多くの小説家や詩人らが居住していました。この地と文人の関わりを日本文学専攻で、編著「武蔵野文化を学ぶ人のために」(世界思想社)もある武蔵野大の土屋忍教授による寄稿で紹介します。土屋教授は、文芸評論家で2013年に亡くなった秋山駿さんから寄贈された蔵書を中心に展示する同大のむさし野文学館の館長も務め、映像作品などで文化の発信にも努めています。掲載は毎月中旬を予定しています。

落葉林の美見いだす

文人の武蔵野

「武蔵野」と聞いて思い浮かぶのはどのようなイメージでしょうか。文字通りの野ではなく林を思い浮かべるとしたら、その源泉には国木田独歩の『武蔵野』があります。「今の武蔵野は林である」と宣言されている通り、野を歩

国木田独歩

国木田独歩の住居跡(渋谷区)



み林を訪ね、「林の奥に座して四顧し、傾聴し、睥視し、黙想」し、雑木としてひとくりにされがちな檜や栗に落

葉林としての個性と美を認めたのが『武蔵野』です。

岩井俊二監督の映画「四月物語」(1998年公開)には、高層ビルも通勤ラッシュも喧騒も雑踏もない東京が武蔵野として描かれています。文学と音楽に親しむ先輩が北海道・旭川から上京してアル

バイトをしているのは、さながら本の森のような「武蔵野堂」書店であり、通学しているのは当時は存在しない「武蔵野大学」でした(撮影地は成蹊大と白鷗大)。その先輩に想いを馳せる女子高生が手にするのは国木田独歩『武蔵野』の初版本です。作中には、現在の都内や埼玉、神奈川県

の地名が列挙されて地理的に武蔵野の輪郭を描きますが、「東京(の都会的な地域)はかならず武蔵野から抹殺せねばならぬ」ともされます。四月物語の武蔵野もまた、高層

建築に群衆が密集する東京らしい風景が除外された場所でした。

独歩自身が『武蔵野』の着想を得た頃に仮住まいしていたのは渋谷村です。現在の渋谷区宇田川町に「国木田独歩住居跡」の碑があります。他方で彼の遺した日記からは、妻となる2人の女性と散策した武蔵境駅近くの林間こそ男独歩にとつての武蔵野であったことがしのべられます。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「武蔵野」

1901年(明治34年)に発行された国木田独歩(1871~1908年)の最初の創作集。表題作「武蔵野」を含めて18編の叙情詩、小品文、小説を自ら選んで収めた短編集です。今回は、当時の地図を表紙にデザインした岩波文庫版をおすすめします。



(岩波書店提供)